

革命前夜のチワワ州

チワワ州がメキシコ革命の主戦場となったのには、いくつかの理由があった。第一に、当時のチワワはルイス・テラサスと娘婿エンリケ・クレエル、そして彼ら一族により完全に牛耳られていた。テラサスは裕福な肉屋の出身で支配階層の出ではなかったが、婚姻によりその仲間入りをした。彼は改革戦争のときにはリベラル派のリーダーとなり1859年、知事になった。テラサスは1876年、セバスチアン・レルド・デ・テハダ大統領を支持したため、ディアス政権の誕生で彼の政治生命は絶たれたかに見えた。しかしその間、彼は事業に専念、アメリカへ鉄道を利用して牛を輸出し、メキシコの金持ちと言われるほどになり、バンコ・ミネロを設立して外国人投資家の受け皿を作った。ルイス・テラサスは政治権力の回復を狙い、1879年には知事の座を回復した。ディアスが再選された1884年、再びその座を追われてからも執拗に十八年以上の歳月を待って1903年、知事に返り咲いた。その一年後、老齢を理由に、娘婿エンリケ・クレエルを暫定州知事に任命して退いた。クレエルは直ちに法律を改定し、それまで選挙で選ばれていた市町村長を知事の任命制度にし、1905年、土地法を改正し村々の共有地を取り上げ、投資家への売却を可能にした。あらゆる社会階層の人々が州全域にわたってテラサス＝クレエル一族に反目していた。

第二に、チワワ州は巨額の外資を受け入れたため、国際市況の影響をもろに受けた。1907から三年に及ぶ不況がチワワに与えた影響は、他の地域に比較して大きかった。また、同じ時期に発生した早魃のため食糧が高騰した。農民は製造業や鉱山に職を求めたが、殆どが閉鎖していた。更に事態を悪化させたのは、アメリカに出稼ぎに行っていた数千の労働者が、コロラドやワイオミングの鉱山閉鎖により、失業して帰国した事であった。

第三に、隣州ソノラやコアウイラでは州知事が革命に同調したのに対し、チワワの為政者の中には革命支持者がいなかったことが、事を単純明快にした。

最後に重要な事は1885年、アメリカ軍に協力してアパッチの指導者ジェロニモを倒し、アパッチの襲撃が終焉するまでは、チワワの自由移民は銃をとって戦っていた。クレエルに土地を奪われた自由移民たちは既に戦闘能力を備えていたのである。¹⁷

革命初期の段階で最も貢献したのはパンチョ・ビヤではなくパスクアル・オロスコであった。オロスコは当時二十八歳、パンチョ・ビヤより四つ年下の彼は、チワワ南部サン・イシドロにある、州内で最も古い家族の末裔であった。父親はプロテスタント、金持ちとは言えないまでも牛や土地、家も数戸持っていた。彼は小学校を終わると実家の店で働き、暫くしてチワワの山野を抜け、貴金属を運ぶラバ追いの一団を護送する仕事を始めた。危険を伴ったが稼は大きく、皆から信望を得て次第にリーダーとしての資質を備えるようになっていった。オロスコの故郷サン・イシドロでは、地方軍司令官ホアキン・チャベツ大尉が護衛する近隣のアシエンダと、住民との間に争いが絶えなかった。チャベツ大尉は二十

年前、冷酷で独裁者のように振舞ったため、トモチ・インディアンの反乱を招いた人物であった。オロスコがチャベツに反感を抱いていた事は間違いなく、彼はフロレス・マゴン兄弟の反逆思想に惹かれ、1907年には急進的なPLMプロパガンダを読んでいることを地方警察に告発されている。革命直前には貴金属輸送の契約をチャベツにより停止され、オロスコの反感は極限に達していたと思われる。チワワ州の権力体制への反発や個人的恨みに加え、政治的野望に満ちたオロスコは反乱集団を組織した。¹⁸

オロスコの一団が動き始めた頃、別のグループがあった。チワワ市に程近いシエラ・アスル連山にあるラ・クエバ・ピンタと呼ばれる小さな牧場で革命グループの会合が開かれていた。この会合は再選反対党の支部長アントニオ・ルイスが招集したもので、クエバ・ピンタの中央広場で焚き火を囲んで行われた。ルイスがサン・ルイス・ポトシ計画を読み上げると、一同目を輝かせ「独裁者を倒せ！自由万歳！マデロ万歳」と叫んだ後、隊長を選挙することになった。選ばれたのはチワワ州ボイラー修理工組合長カストゥロ・エレラであった。エレラは皆に最も良く知られた再選反対党の役員であった。次に二人の隊長補佐が選ばれ、一人はエレウテリオ・アルメンダリス少尉、二人目がパンチョ・ビヤで、其々伍長と4人の兵士が付けられた。¹⁹

17. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P28

18. Ibid. P62

19. Ibid. P63

[目次へ戻る](#)